

まとめ:

1) 本症の骨転移率は、加齢とともに増加し、Total 55 例中 29 例 (52.7%) であった。

2) 骨転移の好発部位は、腰椎 (75.9%)、骨盤 (69.0%)、肋骨 (51.7%) であった。

3) 骨転移巣の X 線写真 (x-p) との関係は、骨 x-p 所見にて、骨硬化型を示したものが 23 例中 13 例 (56.5%)、骨溶解型 3 例 (13.0%)、混合型 3 例 (13.0%)、明らかな異常所見が得られないもの 4 例 (17.4%) であった。骨シンチでは、陽性像 20 例 (87.0%)、混合像 3 例 (13.0%) であり、欠損像のみのものはなかった。

4) 骨転移例の予後は、特に多発性転移のものについて悪く、骨シンチ施行後 1 年以内に死亡するものが多かった。

5) 骨転移進展度と血中 AIP, AcP, および PAP との関係では、骨転移例は陰性例に比し、3 者とも高値を示す傾向にあった ($p < 0.05$)。

また、PAP については、骨転移単発例と多発例の間にも有意差を認めた ($p < 0.05$)。

36. 骨シンチグラムにおける陽性肢

仙田 宏平 (名一日赤・放)

河村 信夫 月田 邦彦 榊原 弘之

大西 勝治 (同・放部)

骨シンチグラムに見られる四肢軟部の広範均等な骨外集積像 (陽性肢) について、その出現機序ならびに臨床的意義を検討した。

対象は、最近骨シンチグラフィを行った約 400 症例中、陽性肢を認めた 21 症例であった。その内訳は乳癌 9 例、直腸癌と悪性黒色腫各 2 例、その他 8 例で、その大多数が術後症例であった。陽性肢の出現部位は 7 例で片側上肢、7 例で片側下肢、4 例で両側下肢、3 例で四肢にあった。理学所見上、これら部位に一致した浮腫が 15 例で検査時点に認められ、また 3 例では検査後 10 日から 3 か月後に明らかとなった。浮腫の明らかなでなかった 3 例中 1 例は同時期に行ったリンパ節シンチグラフィで患側に異常所見を認めた。リンパ節シンチグラフィの施行された 5 例はいずれも患側に異常所見を示し、浮腫の明らかな 3 例で管外漏出像を認めた。四肢全部に陽性肢のあった例では軀幹軟部にも集積増加が見られ、その内 2 例は腎不全を合併していた。他方、両下肢陽性の 1 例は

鉄欠乏性貧血の治療中であった。これら症例の陽性肢の放射能分布は均等であったが、片側の陽性肢例では皮下領域により高い傾向があった。陽性肢類似の骨外集積像は横紋筋肉腫や筋炎の症例で経験したが、これら症例の異常集積像は皮下深部に比較的限局する傾向があった。以上の検討結果より、軀幹軟部への集積増加のない陽性肢はリンパ浮腫によって出現し、その出現は理学所見に先行すると考える。

37. 大腿骨頭壊死の骨シンチグラフィ

牧野 直樹 竹内 昭 浅野 智子

安野 泰史 佐々木文雄 古賀 佑彦

(名保大・放)

安藤 謙一 片田 重彦 (同・整形)

大腿骨頭壊死における骨シンチグラフィの意義について検討した。

対象は、大腿骨頭無腐性壊死 26 例、33 関節で、内訳は特発性大腿骨頭壊死 20 例と、その他 6 例である。^{99m}Tc MDP 20 mCi 静注後 3 時間像と、ほぼ同時期の股関節単純 X 線写真とを比較して病期分類を行った。

骨シンチは超早期から所見を明瞭に描出していたが、集積程度は病期に比例していなかった。しかも股関節単純写真との所見の解離が明らかで、早い時期に目立っていたが、反面遅い時期には X 線所見とかなり一致していた。

骨シンチは早い時期には局所の血流或いは、修復状況を反映しているようで、X 線撮影では得られない状態を示し、病勢や予後判定の可能性を示唆するものであった。さらに、いわゆる cold in hot の所見が全般的に大腿骨頭壊死にはかなり特徴的で、6 割以上の関節に認められ、特に早い時期の診断に有用と思われた。

大腿骨頭壊死において骨シンチの診断的意義は高く、早い時期には X 線撮影以上の情報を提供するものであり、欠かせない検査と思われる。